

巨人の 供物達

ペトラ編

巨大樹の楽園で

…お願い…コロシ…テ…

ADULT
ONLY

ペトラ編

巨人の 供物達

巨大樹の楽園で

ピクルス

どこかのお伽話に楽園に住む男女がいた。
女が悪魔にそそのかされて禁断の木の実を
食べた。女は愚かにも男にも食べさせて
楽園を追われる：そんな話。

あの二人は幸せに暮らせただろうか？

妖怪あんかけ

RPG Company

巨人の供物達

【巨大樹の楽園で】

森で女が目覚めた。

ぼやけた視界が焦点を結んだ時、血だまりの中で男が倒れている。男は背を向けており表情はわからない。白黒二枚の翼が重なる紋章が入ったマントを羽織っていた。その刈り上げた金髪を見て、彼女は呼んだ。

「オル・オ」返事はない。

それどころか彼女は下半身を貫く痛みがあり身じろぎ一つできなかった。

股間を脱臼しているのだろうか、それでも痛みをこらえながら何度も呼んだがオルオは動かなかった。

「待って、今誰か助けを…」

助けを呼ぼうと起き上がろうとした時、ベトラは彼女の頭を包み込むほどの巨大な手に、頭を掴まれた。そしてゆっくりと理解した。彼女の体が何故動かないか、この全身を貫く痛みは何かを。

3メートルの巨人があぐらをかいた上にベトラは背を預け座っていたような状態だった。





巨人の 供物達

ペトラ

巨大樹の楽園で



そのペトラの下半身には、鍛えた男の腕ほどもあろう肉棒が膣穴へ突き刺さっていた。
だがそれが何であるかを理解するのに時間がかかった。まだ異性との経験がないペトラは勃起した男のそれを裸では見たことがなかったが、仮に経験が豊富であったとしても、巨大すぎるそれが陰茎とはわからなかっただろう。
158cmの小柄な彼女の体に、3メートルの巨人の男根はあまりにも大きすぎた。



股間から膣を引き裂いて、巨大な性器を突き通されて胃に届かんばかりに貫かれていた。
ただでさえ太い肉の幹に蔦のように絡みついた血管が浮きだしてゴツゴツとイボのようになった醜悪なそれは、まだ男性を知らなかった処女穴と肛門の柔肉を引き裂いて一つの穴にしてしまっており、突き通ったそれは内蔵を押しつぶして横隔膜の下に当たったところで止まっていた。
ちょうどモズの早贖のように、木杭のような巨人の男根の上に座った状態で突き刺さられていたのだ。



巨人の供物達

ペトラ

巨人の楽園で



さらに股間からは巨人の精液と彼女の引き裂かれた膣肉の血が混ざり合って滴り落ち、血溜まりを作ってそこからもうもうと湯気が立っていた。その量を見れば既に何度も精液を放ったであろうこともわかり痛みよりも嫌悪と恐怖でペトラは断末魔のような悲鳴とともに助けを呼び続けるが声はただ森の中を木霊した。

だが後に続く静寂と巨人の唸り声で理解した。彼等はこの森に取り残されたのだと。

そしてその静寂を打ち破るかのように、ペトラを抱く巨人はペト



ラの腰を抱えて上下に激しく揺さぶり始めた。

節くれた巨根は肉を瓦礫で轆き潰すごとく処女の柔肉を削り落とし、突き入れる度にその肉の断片を混じらせた血が吹き出す。

巨人は性器がなく人を殺し喰らうため動くと言われている。だがペトラを犯すこの巨人には身体的な奇行種なのか：明らかに男性の性器と思われる陰茎があり、ペトラを食わずに咆哮を上げつつ、小さな体に丸太のような陰茎を打ち込み続ける。



ペトラの堪えきれぬ断続的な悲鳴が森に響く。

そして程なく目玉が自身の頭ほどもある肥満体の巨人は灼熱の精液を放った。

巨人の射精は膈と腸と一体となったはらわたの中を駆け巡り一気に胃さえも貫き抜けてペトラは口から大量の精液を吹き出した。

そしてペトラの悲鳴で呼び寄せられたであろう新たな細身の5m級の巨人が、ペトラを奪い取り、震えるペトラを再び貫いた。

一体の巨人につき30分は弄んだであろうか、小さな池ができるほどの精を放った末に新たな巨人がペトラを犯した。いつ果てることない絶叫と悲鳴が巨大樹の森に響き続けた。

巨人に怒り、呪い、罵倒し、泣き叫んで、哀願し、ついには殺しへと懇願した。

だがどんな言葉も巨人には届かず、ペトラの腰に巨人はただ巨棒を突き通し続ける。

次第にペトラの声は薄れ小さく消え失せて、ただ胃を突き上げる度に横隔膜を響かせる強制的な嗚咽が鳴り続けていた。

死を間際にして脳内麻薬物質がフル分泌されて痛みを和らげているのか、既に殆ど痛みは感じなかった。

それどころか不思議な浮遊感があった。

それが性交による快感であることをもしペトラが知っていれば、舌を噛んでいたかもしれない。

だが彼女にはそれがわからぬまま甘美で甘いしびれが全身を包み始める。

意識が朦朧となりながらペトラはとりとめのない事を考えていた。

（そういえばエレンがスプーンを拾おうとして巨人になったみたい、この巨人達はHしようよと：巨人になったのかな：だから男性のコレがある？ でもそれだと、この世界の巨人は全部元人間……アはッ：なんて馬鹿：こんな話したら：ハンジさんが目をキラキラさせちゃうわね。オルオを捕まえて身代わりにして逃がないと）

その時、風でオルオの自由の翼のマントが揺れた。

刹那、その強制的に広がる浮遊感に捕われることをペトラは邪悪なものであると感じ、唇を噛んで正気を取り戻した。

「：オル：オ」

彼女が雌型に踏まれる直前、オルオは雌型の上空に位置していた。

逃げようと思えば逃げれたはず。なのに目の前で動かなくなっている理由をあきらかだった。ペトラをカバールしようとして翼を折られたのだと。

彼女の頬を涙が伝った。



巨人の 供物達

ベトラ

巨大樹の楽園で

雌型との死力を尽くした戦い。

目が潰れて動けないはずの雌型にエルドが食い殺された時、ベトラは一瞬立体機動装置の操作に遅れて、失速し低空飛行となった。その隙を雌型は見逃しはしなかった。回復の力を片目だけに集中して視力を取り戻していた雌型はベトラを攻撃したのだ。

(あの時、冷静に対処していれば、雌型を残ったオルオと二人で屠ることも可能だったはず。私のミスでオルオも……。全部私のせい。)

「オルオ：オルオ：ごめんなさい」嗚咽を漏らしてただ詫びた。だがその言葉に何も返事は返らなかった。

そして何故か私は生きている。

なら、こんな状態でも、自由の翼に恥じないように：残された時間を生きよう。

そう覚悟を決めた時、ようやくベトラは気がつかねばならないことを反芻した。

(何故私は生きている?)





ペトラ篇
巨人の
供物達
巨大樹の楽園で





死を望んだわけではなかった。腫を引き裂かれて胃までを貫かれて、長く生きていられるはずがないのだ。巨人に股裂きにあった団員は幾人か見たが、ほぼ即死であったろう。だが今の彼女はには泣き叫びたいほどの痛みはあるものの、意識はしっかりとしており、それどころか股間の痛みが急速に引いてきているようにさえ感じる。

悲しみと恐怖と絶望で麻痺して見えていなかったのかもしれない。

巨人と繋がる自身の股間から蒸気が立ち上っていた。

これは巨人が回復するときの蒸気のように見えるがこの巨人が傷



ついでにように見えない。では何故この蒸気が出ているのか？これが生きていられる秘密なのかもしれない。

もし：巨人との性行に特別な力。例えば性交した相手の傷を回復させるような能力があるとしたら？

この精液を受ける限り死ねないのだろうか？そんな考えが彼女に浮かんだが同時に頭を振った。

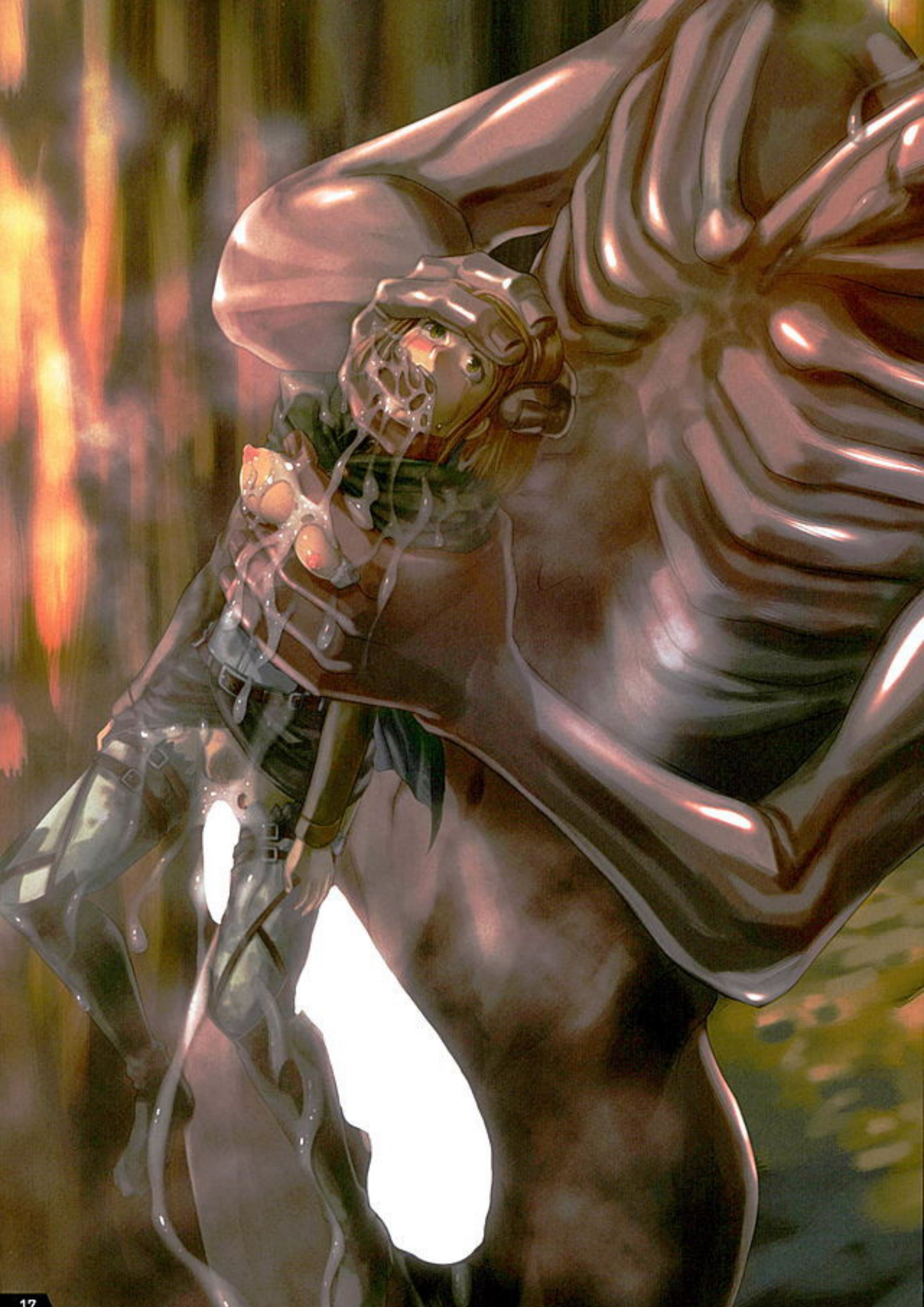
（違うそうじゃない。今じゃない、私はもっと前に死んでいたんじゃないの？）

ペトラ篇

巨人の 供物達

巨大樹の楽園で





彼女は雌型の巨人に踏まれた時のことを走馬灯のように思い出した。

踏まれた時臓器や骨が砕かれて潰れた音。心の臓が弾けた痛み。肺も潰れ血と胃腸の内蔵が混ざったあぶくを吹いた臭い。どれをとっても即死を意味する情報だった。

だが今彼女は声を上げ、泣き叫んでいる。心臓も肺も正常で、痛みは：性交の時だけでそれ以外は、少なくとも肉体的には致死的な問題ないように思えた。死をも超越する絶対的な回復力。それは思い当たることは一つしかなかった。

この巨人の精を受けるといことはもしかすると：

その仮説に思い至った時、ある種の光が彼女の目に宿った。

彼女はオルオの動かない体をじっと見つめながら、いつ果てるとも知れない巨人の陵辱を耐え続けた。

それから数時間して夜の帳が訪れ、ペトラを抱いていた巨人たちは次々と動きが緩慢になり動かなくなつた。ちょうど冬に爬虫類が動きが緩慢になると同じように。

それを待ってペトラは行動を開始した。巨人の男根を引き抜く。血は出ないが湯気が吹き出す。よろよろと横たわった。

ペトラに突き刺していた巨人は目を開いていても眼前に横たわるペトラを追おうとはしなかった。

幸いにハンジの報告にあるような時折いる夜行性の巨人ではないようで、ペトラは自分の回復を確かめるように腹部に両手を当て

てじっと時を待った。

小一時間も十分に休息をしてから、自身の体調を確認しながらペトラは立った。

足取りがすっかりしどこも体の損傷は感じらなかつた。それは彼女自身の仮説を裏付けるものだった。

その回復の程はこの夜の間ずっと歩き続ければ壁にたどり着くことが出来たかもしれないほどだったが、彼女はまず横たわったままのオルオに近づいた。

夜の森は暗く、手探りでオルオの脈を測ったが自身の鼓動の音が邪魔してよく聞こえなかつた。

どんなに耳を済ませても、聞こえなかつた。

なによりも森の冷気でオルオの体は冷たかつた。涙ぐみながら、オルオに囁いた。

「待っててねオルオ：すぐ戻るから。きつとうまくいく」

再び彼女は巨人のもとに戻り、寝入ったように動かない巨人のペニスからいまだ湧き落ちる精液を両手で掬い受けた。手で受けても精液は巨人の血液のように蒸発しなかつた。つまり、体の中に入り込んでも消えないことになる。

私が巨人に〇〇され、蘇つたのだとすれば、その時巨大な巨人の性器は私の膣と腸壁を破壊したろう。つまりその時、巨人の体液が、膣の粘膜か腸壁、または血液に触れたはず。粘膜が触れ合つて病気が感染するように、巨人の絶対的な回復力も感染するのだとしたら？

ペトラは意を決し汲んだばかりでまだ熱い巨人の精液を口に含むと、オルオの口を開かせてから、彼女の口を合わせて注ぎ与えた。だがオルオの食道は雌型との損傷による傷が血塊で塞がれておりうまく飲み込ませることができず、口の端から溢れ落ちるだけだった。彼の体は右半身から強い衝撃を受けて押し潰されている。おそらく内臓の多くが致死的な痛手を受けているはずだ。

次に、オルオのスポンの立体機動装置のベルトを外し、スポンを脱がすことにとりかかる。

半身は血でベッタリと濡れて脱がすのに苦労したが、なんとかスポンと下着を脱がすことに成功する。

「ほら綺麗になった。さっぱりしたでしょ？」

オルオの汚れた股間の血や糞尿を布で拭き取り綺麗にし終えると彼女はオルオの下半身を抱えて、ちょうどオムツを変えるような姿勢を取らせると、改めて取ってきた巨人の精液を口に含んで指で肛門を開き舌を漏斗のようにして直腸に巨人の精液を流し込んだ。だが、オルオは動かない。

それでも諦めずペトラは何度も巨人とオルオの間を往復した。普通に考えれば常軌を逸した行動である。遺体の口や股間に巨人の体液を注ぎ込む怪しげな呪術。

巨人に陵辱され狂っていたのかもしれない。

それでもすがらずにおれなかった。必死にその行為を繰り返した。だが考えが狂っていたのか、時間が経ち過ぎたのか、オルオの息は吹き返すことはなかった。

へたりと腰を落とした。

「な…なんで？…オルオ…生き…返りなさいよ…兵長に全て捧げるとして私にここまでさせておいてさー」

狂ったように心臓マッサージを行い、人工呼吸も行った。

最期には頬を何度も平手で叩いた、それでも動かないオルオにすがって泣いた。

その時気がついたのだ。

オルオの股間が膨らんでいた。

雌型に殺された時、生物の本能で精を放とうとして勃起したまま息絶えたのかそれとも肛門を刺激した為か、巨人の精液を与えたことでそうなったか？ いずれかはわからないがきつとこれが最期のチャンスであると思えた。

ペトラは服を脱ぎ、草むらに転がっていたオルオの立体機動装置を肌につけた。

行為を行っている間にもし夜行性の巨人に襲われてもいよいよだ。

そして、オルオを仰向けに寝かして下半身の上にまたがると静かに腰を下ろした。



ペトラ編

巨人の 供物達

巨大樹の楽園で



果たして：ペトラが悲鳴を発するやいなやオルオだった巨人は腰の動きを止めた。

ペトラの声に巨人は戸惑っているようだ。まるで夢と現実がつかないように。

そのおいたをした子供を論すように、微笑みながらペトラは優しく語りかけた。

「大丈夫：このまま：聞いて：時間がないの」

ペトラは全身から出る修復の湯気に包まれながら痛みを耐えて全身から脂汗を滴らせていた。

オルオの大きすぎる巨人の男根はペトラの体を傷つけすぎた。ペトラも巨人に変わらなければこのまま息絶えてしまうだろう。

もし巨人となれば、さらなる回復が起こり、彼女は死なずにすむ。：と太古からの本能であろうか？ 【巨人の血】が知らせてくれていた。

だが巨人変化の後、人の心が残らない。それも感じ取っていた。だからその前に伝えなければならなかった。

どこまで伝わってるか定かではなかったが、人語でこれまでの経緯をかいつまんで伝えた。

オルオであった巨人はそのまま静かに聞いていた。

だがペトラの息は絶え絶えになり、声はか細く、見える景色も霞んで最期の時が近づいていた。

「ごめん…ね。本当にごめんなさい。私達はもう…きつと壁の中に帰れ…ない。わかるでしょう？…私達…は…エレンと違って、人に出会えば食わずにおれなくなる」

どこかのお伽話に楽園に住む男女がいた。女が悪魔にそそのかされて禁断の木の実を食べた。女は愚かにも男にも食べさせて楽園を追われる…そんな話。

あの二人は幸せに暮らせただろうか？

「ハアハア…でも、私…：…助けたかった。オルオ…：があのまま朽ちていくなんて…耐えれ…：なか…許し…」

無骨な指がペトラの頬を撫ぜた。

「…ズット…一緒ダッタ…コレカラモ…ソリヤ悪クネエ」

ペトラはその手を抱きしめた。

ずっと一緒だった。調査兵団の入団から…死ぬ時まで。私達のコンビは最強だった…だからもうちょっと一緒に彼には悪く無いって自惚れたい。

「…そ…うだ…思い出した。オルオは私の初めて奪ったんだから。責任…：とってもらわないと」

そう言って微笑んだ刹那、彼女は光とともに人でなくなった。

意識は淡雪のように溶けて消え、

二人は巨大樹の森に住むアダムとイブとなった。

END



妖怪あんかけ

RPG Company